哲学研究
第五百三十五号
第四十六巻
第五冊

歴史知識における理論(二)

クルト・ヒュプナー
神野慧一郎 訳

(10) 先験的なるものと経験的なるものとの関係

先験的（a priori）なるものと経験的（a posteriori）なるものとの関係を、大変単純なモデルの助けをかりて、いくらか立ち入って説明してみたい。

$$\left.\begin{array}{ll} (1)\ Fa & (T_1) \\ (2)\ \underline{(x)\ (Fx \rightarrow Gx)} & (T)\ T_3,\ T_4. \\ \quad Ga & (T_2) \end{array}\right\} S_1$$

この図式の表現する推論においては、FaとGaが基本的言明であり、前提(2)は理論Tの一つの公理である。T_1とT_2はそれぞれFaとGaを与えるのに用いる理論を表わしている。T_3が表わしているのは、T、T_1、T_2がそれぞれその形式をとって受け入れられるときに、服している規範的理論を表わし、T_4が表わしているのはGaがTの一つの確認であると

見做されるときに服している判定の理論である。最後に、これらの種々の理論（T、T_1……T_i）をS_1という一つの集合に統一しよう。ところでこのモデルのうち経験的なるものは何か。経験的なるものは、もしわれわれがS_1を前提するならわれわれは特定の結果R_1即ち、Fa、Ga、およびTの確認（confirmation）をうる、ということ、である。それが経験的である所以は、何人もそれを先験的に知り得ないであろうからである。たとえばもしわれわれが以前に与えた例の中で述べたあの政治家の時代に、ある政治原理が存在したという前提がとにかくなされるなら、その政治家はこれらの原理の支持者であったという基本的言明（basic statement）を、われわれは得るでもあろう。この例の他の基本的言明も同じような前提を用いてどのようにすれば得られるか、は容易に示されうるであろう。他方、もしわれわれの小モデルで今S_1をS_2に置きかえたなら、多分異なった結果R_2をわれわれは得るであろう。そしてこれもまた経験的である。という理由は事態はまた別の様でもあり得たからである。即ちS_1が結果R_2をもち、S_2がR_1をもつということもあり得たからである。かくのごとく、このモデルのどんな単一な部分をとってみてもそのままで端的に経験的なるものではない。どんなS-集合も基本的言明もまたそのままで端的に経験的ではないのである。経験的である唯一の要素は次のような類の仮設的関連とメタ文のみである。即ち、もしわれわれがS_1を前提するならば、そのとき結果はR_1であり、もしS_2を前提するならば、そのとき結果はR_2である。

さて、理論が経験的に確認されたとか斥けられたとかわれわれがいうとすれば、これはまさにひとつの省略的な話法なのである。実際、理論は構築されたある先験的なものである。何故なら一方では理論は経験を可能にするからであり、他方また経験によってはその厳密な実証をなし得ないものだからである。そうしたテストは既述のことから帰結するように、S-集合によって設定された条件のもとにおいてのみ遂行されうるものである。この故に、そのようなテストの予知し得ない結果もまたS-集合に依存しているのである。

すでに私が指摘したように、モデルの個々単一の文はそれ自体で経験的ではない。何故なら、そうした文は経験に

よって直接与えられないこと、原理の場合と同様だからである。このことが真と考えられるのは、しかしながら、経験についてのわれわれのいかなる解釈も、経験的内容を超えた理論的内容をもつ場合に限られる。この理論的内容は今やS-集合自体の一部である。それ故、モデルに含まれる単一の文は、与えられた条件の下における経験を表現している。しかしながらS-集合はただ条件を表わすのみであり、しかも私が先験的と呼ぶ条件をもっぱら表わすのである。

従って、先験的な要素は消去しえない。そのような要素は、けれども、そのようなものであることについて特定の正当化をいつも必要とする。この正当化の問題、すなわち、周知のごとくカントが権利問題（quaestio juris）と呼んだものが、不可避的に現われてくる。われわれは、その問題を科学についての哲学の基本問題とさえ呼びうる。もちろんここに言う諸原理はカントが論じた原則（principles）とは趣きを異にする。この点には後に立ち帰るであろう。権利問題を論ずるに先立って、私は、私の言って来た事に関する重要な点についていくらかつけ加えたい。

(11) いわゆる〝解釈上の循環〟

あるドイツの哲学者が見出し、今日しばしば討議されるいわゆる『解釈上の循環（hermeneutic circle）』が全くのナンセンスであることを示すのに、多分上述の単純なモデルは有益であろう。彼らが意味するところのことは経験的な知識のすべてにおいて見出されるのであり、歴史知識にのみ限られているのではない。その故は、私がすでに明らかにしようと試みたごとく、諸仮定および、その諸仮定によって解釈された諸事実との間の関係はどこででも同じであるからである。これが一方において言える。他方このことは決して悪循環を含まない。このことを明瞭に示すために、われわれはあえて $T=T_1=T_2$ と仮定しよう（このとき $(x)(Fx \rightarrow Gx)$ はTに特定のひとつの公理となる）。そのとき、もちろんわれわれはTなしに Fa や Ga を得ることはできないし、他方、Ga なしにはTを確認することはできない。

しかし、FaとGaが実際に存在するという事実はもちろん理論Tによってではなく経験によって（たとえば歴史の記録を読むことによって）与えられる。そこで、たとえば$(x)(Fx \supset Gx)$は中世の市場の掟についての理論の一部であるとしよう。s_1とs_2を、この理論に照らしてわれわれの読む中世の記録に現われる二つの文であるとする。それらs_1とs_2がFaとGaであるという結果があらわれたとしよう。この帰結として、われわれは、われわれの理論がよき理論であると考えうる。ここには循環は全く存在しない。何故なら、われわれは古文書をわれわれの理論に照して読んだとしても、われわれの理論のみからは上述の結果は得られなかったのだからである。つまり、s_1とs_2はFaとGaを意味するのではなく、たとえば、Gaと$\sim$Faを意味するという結果があらわれることも、ありえたのである。Tはここではは FaとGaを得るための必要条件であるにすぎず、充分条件ではない。[20]

もちろん、自然科学においてはGaは未来に起こるであろう出来事を意味するのがふつうであり、これに反し、歴史に関する知識ではGaは過去にすでに起こったことである。この差異があるにも拘らず、歴史についての理論は、Gaのごとき言明により確認または反証されうるのである。Gaは歴史家達によってこれからまだ見出さるべき事実であるかもしれず、また、すでに知られている事実であるかもしれない。第一の場合、Gaは一つの予後診断（prognosis）でもある。第二の場合には、その事実はたとえすでに知られていたにしても、それがある歴史家の理論の確認または反証に役立つ仕方で、解釈されたり、他の事実との関連を与えられることが初めてできるようになった、というのは当然あることである。

(12)　歴史時点上の体系の明確化と変異との説明

これまでのところ私がこの論文で論じたのは時間および空間内に起こる個々の事件と事実とであった。けれども歴史家は新しい諸規則の出現の説明をもせねばならぬ。ここに諸規則とは新しい考え、意見、様式、習慣等々を意味す

る。しかし、この種の説明はすでに述べた説明と原理的には変わらない。新しい規則の出現は私がすでにいくつか刊行した論文で広範囲にわたって論定したように、二つの異なった仕方で生ずる。[21] すなわち一つには体系の明確化（system explications）によって、二つには体系の変異（system mutations）によって生ずる。『体系の明確化』ということによって私の理解するのは、体系の原理には何等変化なきままに、その体系が内的発展をすることである。『体系の変異』によって私の理解するのは、体系の原理の変化、従ってまた、新しい体系の生長である。ところで、歴史家はこのような説明（explanations）と変異（mutations）とをどのようにして説明するのか。説明の場合、肝腎なことはつねにある規則を他の規則から論理的に導出することにある。理想的な場合は物理理論であり、物理理論からは、いくらも定理が導出される。そのような理論は、その理論の明確化とも合わせて、歴史的探究のひとつの主題となる。この種の導出は、憲法、法律、政治、経済および他の発展にもまた見出されうるのである。これらの導出は、個々の場合に結論が与えられた状況の枠組の中で引き出されねばならぬとき、いつも生ずるのである。裁判官、実業家、政治家、科学者などはすべてみなこのような仕方で殆んど毎日、行動しているのである。かくて、体系の明確化は次の形式をとりうるであろう。

(1) 規則の集合Rがある人（または人の集団）に与えられる。

(2) その人はある特定の状況にあり、その状況に対して彼は、Rから導出されうるあるひとつの規則を立てるのだとしよう。

(3) 彼はR′がそのような規則と信ずる。

(4) 前提(1)—(3)を充すある人は、心理的、生物的、物理的等々の理由によりR′を立てる／または立てない、であろう。

(5) 従って、彼はR′を立てる／または立てない。

すでに述べた、中世後期の芸術におけるあるモチーフの出現は、ひとつの例として役立つであろう。人々の生活は、その芸術の従っていた一組みの規則の中で営まれていた。彼らは、自分達が生きていた社会の特定の病的心理状態すなわち疫病による荒廃に適用されうるようなある新しい形式を、その規則の集合から発展させようと試みたのである。そして彼らは上述のモチーフをつくり出し、新しい形式を見出したと、信じたのである。かくて、これらモチーフは規則のもとからあった集合の枠組の中に包含されうるひとつの新しい規則となったのである。

さて、体系の変異に関して言えば、その生起は（体系の明確化のように）一つの体系の内部に（*within*）とどまることではない。何故なら、それは、体系の諸原理が変化することにあるからである。従って、その場合、その体系はひとつの対象言語となり、われわれはそれについて（*about*）論ずるのである。しかし、これが可能なのは、その体系を他の体系の観点から見て批判することによる、正当なる仕方でなされる場合のみである。このことの論理的意味は、一つの体系は他の体系から、ある条件づけを用いて、演繹されるであろうということである。（これに反し、明確化は一つの規則をこれが属する同じ体系の他の諸規則から演繹することである）。歴史上の殆んどすべての革命はこの論理的次元で起きている。理論的体系は実践の体系を変え、またその逆もあった。政治的、経済的、科学的、社会的、宗教的体系はそれぞれ互いに限定し合った。この種の関係の存するところではいたるところ、それぞれ他を刺激し、影響し、変化させた。かくて歴史家は変異の過程を、体系の明確化の説明と論理的に類比されうる仕方で記述し、説明するのである。それをここで細部にわたって示す必要はない。

私は、脚註（11）ですでに述べたのであるが、諸体系による歴史的説明の限界を今一度指摘したい。第一に、人は歴史時点上の体系について、それが極めて錯綜しているとしても、ひっきょう連続的な発生系譜をもつものという考えをつくり上げ、この系譜はあるこみ入った型の、長い演繹の連鎖によって記述しうるとするかもしれない。われわれは、しかしながら、無意味なこと、矛盾、狂気が、歴史の流れの中で大変重要であり、実効を伴うものであると見

做されねばならぬことを心にとめておかねばならぬであろう。これらは私が以前に示したように如何なる論理的連続性をも破壊するかもしれない。そしてさらに、この連続性の観念の実現を損なうかもしれぬもっと基本的ですらあるようないくつかの困難、すなわち、諸体系の理論的認識の構造にかかわる諸困難があるかもしれぬ。私の指摘したいのは、諸体系は、どんな分野を扱うものであれ、いずれも説得力ある形で決して経験と理性とに基礎づけられ得ないことであり、このことは先験的なものと経験的なものとの上述の関係から推測しうるごとくである、ということである。この意味するところは、ある程度まで体系というものは自発的な創造によって築かれるのであって、この自発的創造を不可避的な明証によって最終的に基礎づけることは、ある哲学者は今日なおわれわれに信じさせたがっているけれども、決してできないということである。さて、これらすべてのことから次のごとく結論しなくてはならぬ。即ち、この特異なる自発性の故に、歴史時点上の諸体系は、互いに連続的につづいていたり、不連続的であったりするのである。諸連続は、いわば決定的ではない形で形づくられ、絶対的な経験や理性に基づくものではない。それらは再び砕かれ、新しい始めをもつものとされうるのである。これはしかし、私が変異について語ったときにすでに示したように、周囲の背景の境界内部でのみ可能である。それは以下においてずっと明らかになるであろう。

(13) 歴史上の状況における理論的原理の正当化

今や、最後に、すべての経験的知識の、従って、歴史についての知識の、基本問題というすでに触れた問題に向いうる。それは、経験的知識を基礎づけている先験的な諸原理の正当化の問題である。もし先験的な原理に対する超越論的な正当化がないなら、――このようなものがないことを私は当然のことと認めているのであるが、――さらに、経験的な正当化がありえないなら、そしてもし、すでに記した『決定的ではない（pending）』ような条件が全くの恣意と解釈されるべきでないなら、我々のいたりうる唯一の結論は、これら原理の説明はまず他の理論から取り出され

たものであるか、あるいは、もっと一般的な言い方をすれば、歴史家がなじんでいる他の歴史時点上の体系から取り出されるものである、ということである。このことを私は体系の変異について以前に論じた時に指摘しようと試みた。かくて科学者は、自分の主題をなす種々の体系をできるだけ包括的な関連に入れようとする。彼は諸矛盾やいかなる種類の曖昧さをも拭い去るか、またはすくなくとも、剔抉しようとする。これが歴史家の場合に意味するのは、彼の主なる意図が向けられているのは、歴史の素材をこの包括的な関連に入れること、そしてこの関連の先験的な公理的、判定的、および規範的原理をこの包括的な全体に属する他の諸原理と調和させること、である。それ故、歴史家は自らの原理を生の他の分野の諸原理または他の事柄についての諸原理――これら諸原理はある理由によって今のところ先験的に正当化されているように見える――から演繹し、しかる後、演繹した原理を彼自身の知識の分野で用いるのである。[22] これについていくつかの例を与えることが役立つかもしれぬ。

啓蒙の時代という、歴史についての知識が神学や宗教上の教義から分離を始めた時代にはすでに、歴史家が蒙る種々の影響はすでによく知られていた。だから、ドイツの歴史学派の先駆であるゲッチンゲンのシュレッツアー(Schlözer)とリューフス（Rühs）とは、歴史の知識に対して他種の知識がもつ重要性、および、歴史の知識が政治的、社会的、および他の要因に対してもつ関連にも注意を向けた。[23] 彼らはこのようなことをかえってなしやすかったのである。というのは彼らは、私が判定的（judicial）および規範的（normative）と呼ぶ原理を、文献学や聖書研究ですでに樹立され充分に展開されていた当時の批判的方法から、全く意識的に取り出していたからである。殊に彼らは批判を済ませた新約聖書の版を理想とみた。シュレッツアーは手稿（manuscripts）の比較、歴史の原資料からの誤りの除去、後代の書きこみ（interpolations）資料の改竄（falsifications）、歴史の著作家達の用いた種本の発見、などを論じている。このような方法の源泉は、宗教改革の時代の後、非常に強く世界を支配していた宗教上の論争の流布にあることが指摘されているのである。これに対応してゲッチンゲン学派の第一人者たるガットラー（Gatterer）もまた、政

治的に最高の重要性をもつ種々な法的、憲法上の問題に関して、批判的な学問的研究方法を歴史の知識へ移行した。歴史はそれ故、知識に対して規範的なはたらきをする概念が他の分野ですでに設定されて後に、ひとつの学問的知識（a science）となったのである。上述の場合には、この概念は明らさまに、すでに確立された学問の分野から新しい分野へ移行した。しかし、この発展の生ずるのを助長したのは、ひとり聖書批判と古典文献学のみではない。自然科学も、そして自然科学によって発展させられ、いかなる神学からも自由になった経験の理論も、決定的な役割りを果たしたのである。これは（ゲッチンゲン学派が現われるずっと以前に）ベイルの著作の中ですでに明らかである。ベイルは上の説を歴史上の事実の源泉に適用し、それによって歴史家のために批判の方法を発展させたのである。[24] 歴史の学問が最絶頂に達したときにさえ、ウェブ（Webb）はランケのことを、講義室を蒸留器の代りに文書（documents）を用いる実験室にした者とまで言い得たのである。[25] なによりも、しかしながら、歴史に関する諸学は、自然科学から公理になる諸原理を取り込んだのである。こういうと最初は奇妙に思われるかもしれない。けれどもしかしこのことは『法則（law）』という語の歴史の領域への導入によってもっともよく示されている。ヴォルテールはそれを試みた最初の人である。彼はニュートンの自然学に類比されるような歴史の著作を書こうとあきらかに欲していた。[26] 記述された諸々の出来事の彼の解釈方法、それら出来事のなかで働いていると彼が考えている諸原理、それら出来事がもっていると彼の信じた体系的構造、これらすべては彼が心の中にいだいていた観念によって完全に限定されている。（彼の試みで成功しているのはどのような形のものか、また、彼がニュートンを正しく理解していたかどうか、ということは、ここでは重要でない）。モンテスキューもまた同じような観念をいだいていた。というのは殊に彼は彼の『法則』を自然的な条件から、特に気候上の条件から導出したからである。[27] われわれは、自然科学との直接的でそれと認められるような関連が後には失われたことを認めなければならぬ。啓蒙のこれら一番の始まりは『哲学者（les philosophes）』が歴史を書く仕方であるとして斥けられさえもした。そしてその仕方は『博学の人（érudits）』の仕方

によって置き換えられねばならぬものとされた。しかし、博学の人（érudits）の中で最も有名な人の一人であるギボンが、合理論の公理という自然科学とともにでき上がったものを、彼の歴史著作に移入したことを一体誰が否定しようか。このことをなすに彼は、すべての出来事を『自然の光（lumen naturale）』に照らして眺め、万事をそういう仕方で説明し、解釈したばかりではない。それにもまして、彼が出来事を記述するのに用いた手段は、啓蒙主義的キリスト教批判が用いたものであった。おまけに、現在では、歴史についての知識を、他の分野の知識との関連において見るのみならず、私の用語を用いさせていただくなら、（政治、経済、社会的構造等々の）歴史時点上の体系一般という、歴史についての知識がいかなる時代であれしかと固定されるべき土台との関係において見ることが、殆んど当然のこととなっている。こうしたことは現在、特別の重要性を獲得している。というのはわれわれは歴史的な諸学問の歴史を研究するのにかつてのゲッチンゲン学派やアクトン卿（Lord Acton）の考えを再び採り上げ始めたからである。[28] これは現在起こっている。とは言ってもその際、認識論や科学哲学の諸問題は、大抵、まったく見落とされている。というのはそのような相互関係を探し出すだけでは充分でないからである。われわれは、また先験的なものの正当化とそれに関連したあらゆる問題とを、同時にそのような相互関係の中に認めなくてはならぬのである。

さて、理論と歴史時点上の諸体系の循環とは、歴史家が自らの理論に対する諸原理の正当化をそれによって獲得するものであり、また、そのような諸々の正当化の解釈をつけるのに用いうるものである。この循環を私は歴史上の状況[29]（historical situation）という。常に正しく絶対的な理性も存在しなければ、純粋で、解釈をふくまぬ絶対的な経験があって、歴史家を、歴史的状況から分離し、それとの関わりを解き放つのでもない。歴史家の展開する歴史の絵巻はそれ自体歴史的である。つねに彼は先験的なものを使用する。彼はその基礎の上に彼の思索と経験を立てて前進するのであり、先験的なもの自体は彼の徹底的に吟味する題材と宣言することはできない。議論の鎖はどこかで終わらねばならぬ。すべてのものが吟味されるのではない。多くのことが、充分――今のところは――説明されたものと

見做されなくてはならぬ。この多くのことはすべていつかは厳しく批判されるであろう。けれどもそのときには、歴史上の状況が変わっており、科学者が依りかかる別の何かがあるであろう。本当の一番最初のことから生じるものは何一つないのである。この反対を信じた人、たとえばデカルトやディングラー（Dingler）は間違っている。同じことはわれわれの用いうる前提はどれも恣意に定められると考える人についても当たる。それは、すべてを証明しようと試みるのと同じく不可能である。歴史家について私が今言ったことは、すべての経験科学者についても、必要な変更を加えて言えば、真である。学問の不休熄まず、益々その知識を拡大せざるを得ない原因の一部は、正当化の問題という、絶対的な解決の決してあり得ない問題にある。正当化というこの問題の解決はつねに暫定的に、その場しのぎ的（ad hoc）で、仮定的であり、ある歴史上の状況に関係づけられている。それ故、学問は決着のつかない状態をつづけるであろう。このことを私は別のところですでに包括的に論じ、このような事態だからと言って懐疑的な諦めに陥る理由はわれわれにないことをも論証しようと試みたので、ここではこれ以上この問題に立ち入ろうとは思わない。けれども歴史についての諸学問が問題である限り、諸学問が休みなく動いていることの今一つの重要な理由が、存するのである。従って、先験的な原理とそれらが独特の仕方で絶え間なく変化することの正当化もなお存在している。——そしてこれが私が今論じようと思うものである。

(14) 現在の関数としての過去

私はダントが考案した『物語り叙述文（narrative sentences）』という概念から始めたい。[30]

彼はこの概念を就中つぎの例で解明している。イエーツはゼウスのレダ凌辱を詩の中で描写して書いている。

〃腰部の戦慄はかの落城を招来し、堂屋と高楼の炎上を招来し、そしてアガメムノンの死をもたらした〃。

ダントが物語り叙述文と呼ぶもののこの例で示そうとしたものは何か。彼が示さんとしたことは、そこに描写され

た出来事が本当に起こったと仮定しても、その目撃者は未来に何が生ずるかを知り得ない故に、上述のような文は決して書くことができなかったろうということである。さて物語り叙述文が示すことは、今から後に起こってくるあらゆることの知識に照らして後に見られるところに比べると、今起こっている事は、歴史家には極めてしばしば別のように見え、また、実際に極めてしばしば全く異ったものである、ということである。このことは、歴史家が目撃者になら利用できるどんな細部をも知っているとしてもやはりまた真である。ある事柄は目撃者にとって極めて重要に思われているが、後の出来事に徴して見ると無視できるものと見えるかもしれないし、その逆もまた真である。ある事柄は目撃者には密接に結びついているように思えるが、後にはずっとかけ離れたものであることが明らかになったりする。目撃者は、われわれが見ると大変よいものと見るものを、大きな禍として記述するかもしれぬ。また目撃者が何らかの事実を解釈する枠は歴史時点上の体系であり、われわれが後に完全に別様に構築せざるを得なくなるかもしれない。今一度私の強調したいのは、こういうことは、我々が知っているのが目撃者の知っていたことと正に同じであったとしても、あるいは、別の言い方をすれば、目撃者自身が経験した出来事そのものに関する新しい事実を見出すことなしにも、起こりうるのであること、である。その理由は、時間的距離の増大にともなってこれらの出来事は他のもっと多くのそしてもっと後の出来事に対して異なった関係にあると見られるようになるからである。われわれはこれを、われわれがまず絵を極めて近いところから見、ついでそこから次第に後ずさりした場合に、その絵に対していくつかの相異なる意見をもつことと比較しうる。対象の細部はますます異なった関連をもって見られ、従って、それらの意味も機能もさらには内容もまたわれわれにとっては変化するであろう。日常生活においてすらわれわれはしばしば次のように言うことをも想起していただきたい。「以前に私に起こったことを今日は別の意味合いで私は見る」と。そして、これはわれわれが先きに実際に生じたそのことについて、より多くの情報を後から得たということを必ずしも意味しない。その意味するところは、事柄というものは、どういう結果がそこから生じ、後でどういう事

が起こったかをわれわれが知るなら、端的に別のものに見えるということでもある。

このことをより明らかにするために、願わくば私がダントの洞察を深めるに役立つでもあろうような一つの例から始めたい。この例はヴォルフガング・シャーデワルトの著作『ツキュディデスの歴史記述』からとられたものである。私は後からそれについて行なわれた歴史家や文献学者達の間でなされた論議には立ち入らない。というのはここでのわれわれの関心は、シャーデワルトがツキュディデスの解釈において実際に正しかったか間違っていたかということではないからである。われわれが必要とするところのすべては、シャーデワルトが原理的には正しくあり得たという仮定であり、このことを誰しも真面目には否定しないことは確か、である。加えて、シャーデワルトの著作に関する限り、大概の批評は細部に言及するのみである。そして他方ツキュディデスの解釈者達の殆んどは、シャーデワルトと彼の偉大な先達エドアルト・シュワルツ（Eduard Schwartz）（*Das Geschichtswerk des Thucydides*, 1929, Cohen, Bonn）とに、私の見るところでは、主要点で同意している。すなわちツキュディデスはアテネの最後の敗北の後、ペロポネソス戦争の彼の報告を書き直した、ということで一致している。そこで問題はこうなる。ツキュディデスが戦争中に書いたところのものは何か、そして、戦争の後に同じ出来事について書いたところのものは何か。この出来事が起きたとき彼にどのように見えたか――というのは彼は多かれ少なかれその出来事の目撃者であるから――そして、すべてが終わったときその出来事は彼にどのように見えたか。その答は、細かな点に関してはどのような差異が存しようとも、「とにかく大変異なる」というものである。シャーデワルトは書いている。『シシリー遠征の記述に、著作全体の中でのその体裁と範囲に関して与えられる重要性は、シシリー遠征という出来事がペロポネソス戦争全体の中で持つとツキュディデスの考える重要性に基礎づけられねばならぬ』。[31] このことからシャーデワルトは結論して、ツキュディデスの著作の第六巻と第七巻とは（これは上述のシシリー遠征という出来事を述べている巻である）、戦争の終わる以前には書かれ得なかった、と言う。ツキュディデスが紀元前四一三年におけるアテナイの軍隊の全滅を解釈

して、紀元前四〇四年のアテナイの滅亡へとたかまり行く展開への決定的な転回点であるとしえたのは、回顧的洞察(hindsight)によってのみである。シシリーの不幸の一人の目撃者（文字通りに目撃者ではないとしても）としては、彼はそのことを予見できなかったのである。それどころか、アテナイの地位はキジコスにおける勝利によって後にずっと改善されさえしたのである。

終局の知識のみ、すなわち、最後の不幸の後の総括的な回顧的洞察、換言すれば、運命の完結のみ。まさにこれらあってのみツキュディデスはなし能うたのである。すなわち彼は、直接見うる光景の背後にあって動かす力を認識し、従って、本当に進行しているところのものを新たな仕方で解釈したのであり、そしてまた、関連なきがごとくに思われるところに関連を見てとり、ある出来事を解釈して、何人も予見し得なかった後の展開の原因、理由、動機とすることができたのである。シャーデワルトは更に書いている。『ここで人間のもろもろの営為(erga)が完全な仕方で見出されるのみではない。一つの独自なまとまりをもった営為(unique coherent ergon)(Ⅶ, 87. 5)が、ここで歴史的に理解されるにいたったのである。すなわち、今や一つの統一をもった活動としての二七年間全体にわたる戦争の一部として理解されるようになったのである。この総括的統一の相の下にその営為の重要性が認識されうる。その営為はその重要性と内的な意味に応じて形をとらしめられ、実在性の意味が探ぐり出されうるのである』[32]。

従ってツキュディデスはペリクレスの演説を書き直さねばならなかったのである（『ここで彼はこの政治家の四二九年の知識と意図とに従ってではなく、四〇四年以後の歴史家の意図と知識とに従って語るのである』[33]）。彼はこれら諸演説を用いて、ペリクレスの理想と、後には彼には実在と思われたがこの時にはまだ充分認識されていなかったいろいろな力との対照を、示さねばならなかったのである。彼は一方においてアルキビアデスの行為とアルキビアデスに対するアテナイ人達の中のあらわな憎悪とを結びつけなくてはならず、他方、四一三年の不幸と後の四〇四年の不幸とを結びつけねばならなかった。この結びつきがツキュディデスに見えてくるのは、彼が、アルキビアデスについ

てのアテナイ人達の間の争論の高まりは、もっと深い政治的な病の一つの徴候にすぎなかったこと、つまり、彼の祖国の人々の先きを見通す洞察力を、徐々にくもらせて、後にアテナイの最終的敗北にいたる、一種の頽廃のひとつの徴候にすぎなかったことを、見出しての後である。彼はその全期間を一つの戦争として扱わねばならず、従って軍事作戦の合間にある、比較的長期の平和をもふくめて、一つのまとまりある展開に結合せねばならなかったのである。彼はアテナイ人の類を見ない独自性と重要性とを強調しなくてはならなかったが、これらはこの時期のあらゆる分野に見られる、溢れんばかりの努力の功業と成功の後に、また、絶望的で破局的な状況のうちに示された確固不動と叡知とを見て後に、はじめて理解されるものである。回顧的洞察によってのみ彼は更に進んでテミストクレスとパウサニアスを、それぞれアテナイの民主主義とスパルタの寡頭政治とのかかえていた諸問題の偉大なる典型であると認識し得たのである。回顧的洞察によってのみ彼はペロポネソス戦争の原因と動機とは、はるかにさかのぼってペルシャ戦争のすぐ後につづく時代にまで見出されることを認識したのである。最後に私は彼の第一巻のいわゆる『古代学(archeology)』について述べたい。これはツキュディデスが歴史に対してとっている、暫定主義的な立場で一色に規定されている。ツキュディデスがそこで想起していることのうちに就中、次のことがある。すなわちギリシアの各種族は明らかに、すでに一つの国民等々をなしていたのに、しかも基本的なところで統一があるのを意識していなかったわけでもないのに、彼ら自身をギリシア人とはもともと呼ばなかった、のである。かくしてわれわれは見てとりうる。ツキュディデスはある出来事を解釈して、ある政治的な病の徴候、すなわち、他の病と同様にその診断はずっと後にのみ可能となり、そのときすぐにはできない、病の徴候としている。そして最終的に病気を診断して後、彼はある出来事をその『原因』と解釈し、その出来事にその限りで新しい意味と重要性とを付与したのである。というのはもしある人が、ある出来事はある病気の原因であったと言い、そしてこのことをこの人は今まで知らなかったとするならば、この人は明らかにこの出来事に新しい意味を与えたのである。そしてもし、この病が不幸な帰結をもち、

また彼はこのことをそれまでは知り得なかったとしたら、この出来事は今まで持っていなかった新たな重要性をすら獲得するであろう。更に言うべきは、これまで全く離れ離れと見えていたいくつかの出来事がこのような仕方で結びつけられることがある、ということである。というのは、いくつかの別々の徴候を互いに何の関わりも持ち得ないとわれわれは考えるかもしれないが、結果を、すなわち、病気がついに表面に現われたのを知った後では、これらの徴候すべては互いに関連があり、同一の病気の徴候でありその発現であったと、悟ることもあろう。第二にわれわれは更に見てとることができる。明らかにツキュディデスが記述せんと試みたのは、私が歴史時点上の体系（historical systems）と呼ぶあるものである。すなわち、例えば、アテナイの民主主義、スパルタの寡頭政治、ペリクレスの政治思想などの構造（体系）である。ツキュディデスの意見では、上述の『病気』は毒のように作用し、漸次にすべてを破壊しつつあったものである。従って、それらを述べる彼の記述は、この『病気』の診断を彼が下した後に変わったのである。加えて、歴史上に現われる体系は直ちに姿を現わすのではない。[34] まったくゆるやかに時の流れとともにのみ展開されるのであり、かくして、その可能性、内的含み、その核心、基本的観念等々を顕わにするのである。歴史の現象の根源性、独自性、偉大性はその終局以前には決して知られ得ないのである。

ツキュディデスの語る病気とは、これらの時代のギリシアの全くの秩序喪失である。というのはギリシア人達は、ホメロスの時代に見られたもっとおおらかな態度のもっていた調和をすでに失なっていたので、現実と理想とはますます隔離してきていた。権力への政治的意志はむしろ自然なものであるとしても、綜合的な理解力と観念とによってもはやうまく釣合がとられておらず、万人の万人に対するあさましい戦いへと堕落していた。ツキュディデスによればこれは、一方においては、アテナイの民主制の、また他方においては、スパルタの寡頭制の、より深い所にある構造的欠陥を反映しているにすぎないのである。アテナイの民主制は煽動政治と腐敗と無秩序とへ不可避的に向わずにはいられなかったし、スパルタの寡頭政治は必然的にますます沈滞と不毛に陥りつつあり、そして最後にはそれ自身

の権力を保つことのみに努めたのであった。かくして両体系とも、いずれ劣らず、多くの意味で自己矛盾的であることがあらわになり、従って、滅亡するの運命にあったのである。

さて、これらすべての事がツキュディデスによって認識されたのは回顧的洞察によって、しかも出来事そのものについてはそれがかつて生起してから洞察を行なうまでの間に情報をより多く持つことなしに――このことがまさにここでの眼目である――なされたのは、本当であるように思われるとしても、それなら何故に、高度の予言能力をもつある人があって、戦争の終末を予見し、従ってまた、後になってのツキュディデスが書きえたところのことを直ちに書きえた、と想像し得ないのであろうか。この場合過去の出来事の解釈には何の変更も必要でないであろう。

真実はこうである。今言われたような直観、予言能力、または全くの僥倖なしには、上述のような予見は歴史においてなし得ない。何人もそのような予言を合理的な仕方で正当化し得ないであろう。というのは、そういう場合に用いられうるであろうような厳密な規則や法則というものはないばかりか、決定的でない規則や法則すら存しないからである。[35] 今私はここで不合理的な、あるいは奇蹟的ですらある予言について語っているのではない。そのようなものはもちろん想定はできるし、時には実際に起こったことさえあるかもしれない。私がここで論じている問題は、歴史家が合理的に振舞い、従って責任ある仕方で事物を見、また記述する枠を越えないならば、後から生ずる出来事がそれ以前の出来事の解釈を必然的に変える次第如何、という問題である。私は医者が患者のもつ病気がいかなるものであるかを直ちに証明し得なくとも、感じとることのしばしばあるを疑わない。しかし、その場合医者が責任ある仕方で合理的に振舞うには、性急な行動をとらず、かえって病気をそれと診断し、証明しうる仕方で以前の出来事を再解釈するための、より多くの徴候を待つことが必要である。

誤解を避けるために私は強調しておきたい。私はもちろん、変化し得ない事実、たとえば、前四〇四年のアテネの敗北、ペロポネソス戦争中のいろいろの戦いの結末などがあるのを否定しない。しかしこの種の出来事は全くの年代

記にも見出されるであろう。事実の解釈を行なうものたる歴史家のものする著作は、年代記と混同されてはならない。われわれは固い核をなす事実（hard-core facts）と、現われる様相が多かれ少なかれ変化にさらされる事実とを区別する。たとえば私はペリクレスが疫病で死んだ事実を一つの固い核をなす事実と呼ぶ（これはこの事実が絶対的に真だということを意味しない）。けれどもツキュディデスによって報告されているペリクレスの演説はそのようなものではない。

過去というものは、大抵の人々が考えているところとは反対に、時間の関数である。私がこういうとき、如何なることを意味しているか望むらくは明瞭になったことであろう。シラーは言った。『永遠にぞ過去は静まりてあり（Ewig still steht die Vergangenheit）』と。これぐらい間違った意見はない。われわれは変わるのであり、それ故にわれわれは実際に生起した過去を再構築するのに困難をもつことがある、というにとどまらない。事が本当にはどのように生起したか（ランケは“wie es wirklich ist gewesen”と言い表わしている）を見出すということが、それらの事を目撃者の見ることができたごとくに見るためにわれわれのもっている趣味、流行、あるいは神話的な『時代精神（Zeitgeist）』などという覆いの幕を取り除くことを意味するなら、これは歴史家の主要問題をなすものではない。まさにこの反対である。このようなことは、この幕の背後に存在している不変なる真理という幻を求めることの誤ちにわれわれを導きこむのが大方であろう。歴史家の主要な課題は、過去が時代を経る間にさらされた不可避的な変遷を斟酌しつつ、幾度も歴史を書くことである。

これがどのように起こるかは、古代ローマの衰えについての歴史の諸著作の歴史が、また、大変印象的に示すところである。[36] これはツキュディデスの例を補完するものと見做され得よう。ローマの滅亡は西欧の歴史の流れの中でのまことの論題の一つである、――西欧の歴史は人間の自己理解（self-comprehension）ならびに回顧に関して生じた大きな変化をわれわれが見出すことを可能ならしめたものである。もしアウグスチヌスが古代ローマの滅亡をもって、

あらゆる限度を越え長期にわたる人間の背徳の報いであると、見做したとするなら、彼がそれをなし得たのは、彼がすでにキリスト教の時代に生き世界の終末の知識をもっていたからこそである。オット・フォン・フライジング（Otto von Freising）は、一つの中世的な見地に立っており、この古代の出来事を一個の時代の全体的衰滅とは殆んど考えていない。彼はむしろこれを『フランク人とチュートン人とへの帝権の委譲（translatio imperii ad francos et teutonicos）』の徴候の一つと見ている。この委譲においてローマの普遍主義（universalism）は保存されてはいたが、次第にゲルマン国家の神聖ローマ帝国の方へと変わって行ったのである。このようにしてのみ、また、そのような連続性においてのみ、カソリック的観念は生長し得たのである。一方には世俗的なローマ帝国の滅亡、そして他方には、キリストの超越的な帝国の形成があって、互いに対応しているのである。そうであるから、われわれにとっては古い世界の破滅と見え、従ってまた新しい何か別のものの始まりと思えるこのことが、オット・フォン・フライジングの心中では、連結された通信管のもつ統一のごときものであると見えたのである。

マキアヴェリはこれについて全く異なる意見を持っていたし、そのことは不可避でもある。キリスト教的政策が基本的に問題を含んでいることが漸次証示され始めて以来、彼はローマと中世とを一つの統一体と考えることはもはやできなかった。そしてまた彼はローマの滅亡を単に贖罪劇の序曲であるとはもはや解釈し得なかった。評価の基準は逆にされた。そしてかつては結びつけられたものが、再び切り離された。結局のところ永遠の国（eternal city）の滅亡が現在の不幸に到ったのである。これは偉大さに充ちていた古い世界の没落を特徴づけて、悲惨で一杯の新しい世界への道を開くものとするのである。それ故この移行の諸原因は超越的なる何ものかであるとは、もはや見做されえない。というのは、それら原因の見出されるのは、人間のもつ自然的な諸力と、その時の歴史上の諸体系の諸原理が矛盾し合う性質をもつこと、とのうちにおいての筈だからである。ギボンがこの途に沿って更に進んでいるのをわれわれは見る。彼はただ非常な量の歴史の材料をマキアヴェリの諸公理に附加したのみであり、殊にそれによって彼

は自分の意見を基礎づけて、比較にならぬ程はるかに深い批判の上に据えたのである。すなわち、キリスト教の教理と方策とに対する批判として、合理論を通じて発展して来たものの上に据えたのである。

アウグスチヌス、オット・フォン・フライジング、マキアヴェリ、ギボンの諸著作の中には、彼らの生きた諸時代の基本的な思想が常に反映しているのである。私は歴史の中のこの大事件を詳細な点の解釈は異なっていてもやはりこのような仕方で、多かれ少なかれ詳しく記述した他のすべての人々に言及することができない。しかしながら、またわれわれが見てとりうるのは、歴史の主題そのものが歴史的発展の流れのうちで、われわれの意見を、如何にして余儀なくわれわれをして変えしめるか、すなわち、何が重要であり重要でないか、何が離れた別のものであり、何が関連しているか、その中で何がよきものであり、何が悪しきものであるのか、についてのわれわれの意見を如何に変えしめるかを見てとるのである。われわれは歴史の主題（subject）の変更が、どのようにそれについてのわれわれのより正確な構成と、それを個々の詳細について解釈するわれわれの試みとを、変化させるかをも見てとりうるのである。私が『主題が変わる』と言うとき、その表明するのは、その主題が後に生じた出来事との新しい関係に入ったことのみである。何故なら、私がすでに示そうと試みたごとく、主題は原子のごときもの、すなわち、それに他のものを単に付加しうるという類のものではない、のである。それどころか、同じ主題が新しい光の下に現われるのは、出来事を一まとまりにする配置結合の構図（constellations）が変わったからなのである。それは解釈の新しい可能性を蔵し、歴史家の選択を待つばかりのものである。

(15)　理論の原理の正当化の三つの形式

先験的原理（apriori･stic principles）の正当化の問題に立ち戻るために要約しておきたい。

第一。この正当化は、科学者が住するところの多様なる歴史時点上の体系との関連において進行する。

第二。これら原理の変遷は、この多様な体系のうちに必然的に生ずる変遷によって、正当化される。

第三。歴史上の主題（subject）の場合、先験的原理の変遷は、主題自体の必然的変遷によって、さらに正当化される。この意味するところは、より正確には、これら変化した諸原理が正当化されうるのは、一方では、新たな解釈をなす可能性、すなわち、主題によって供せられる可能性によるのであり、他方、これら変化した諸原理を正当化する議論は、これら変化した諸原理が表明しているのは、与えられている多様な諸体系と調和するところのこの可能性が選定されているということである、というものである。

あるいは人あって思うかもしれぬ。先験的なものの変化の決定は、主題によってもなされるのであり、従って経験によってもなされるのであって、ただに先験的なもの自体のみによるのではない、と考えることに矛盾がある、と。しかしながら私はさかのぼって、すでに私がモデルを用いて先験的なもの（the aprioristic）と、経験的なもの（the aposteriori）との間の対応について示そうとしたところのことに言及したい。当然ながら、先験的経験なるものの無媒介な決定というものは存在しないし、先験的なるものとしての先験的なるものがそのような決定に服することも決してありえないのである。反対に、経験による決定は常に、S－集合によって与えられる条件の導入によってのみ、なされうるのである。この故にわれわれは常に、経験をして理論に判定を下さしめるか、または、これら経験を、それに不可避的にかかわりをもつ先験的な道具立てを用いて拒否するか、のどちらかを選択しうるのであり、この拒否を正当化するのには、これら道具をなおそのうちに包含している多様なる体系の包括的な関連を用うることが、たとえばできるのである。[37] 先に私が言っておいたように、今、カントのことに立ちもどってみる。カントが誤っていた点は、先験的綜合判断が論議の余地なく、永久的で、一般的妥当性をもつと信じた点である、と言わねばならぬ。実際のところは、先験的綜合判断は、ある理論すなわちニュートンの理論の、基本的構想の一般化以外の何物でもなかったのである。この故に、カントの考えは物理学の歴史の進展に伴い、もはや真とは見做され得ない。カントを真とみ

ないのはしかし、古い先験的原理の代わりに別の原理をおいて、物理学の主題を新しい光の中で見るためにのみなされていることなのである。というのは、そのような原理がなくては、主題というものがそもそもないであろうからである。変化のこの過程において、係わるのは、一部分は、上述の省略的な意味での経験であり、また一部分は、そもそもこの経験を可能にし、歴史的状況を特徴づけるS－集合の正当化である。基本的にはしかしながらS－集合が最後的な決定の言葉を言う。というのは、何が経験と事実とによって基本的に理解されねばならぬかを定義するのはS－集合だからである。

S－集合がどのようなものに見えようとも、歴史上の主題の場合には、それは、この主題を変化しつつあるものとして経験することを可能ならしめる先験的条件を含まねばならぬのである。だから歴史上の主題はS－集合が供与していた先験的な道具立てを再三再四、ばらばらにするであろう。

(16)　結論

極めてしばしば、歴史著述の目的には懐疑があった。というのは、歴史は、出来事が実際生起したごとくにではなく、われわれがそれら出来事を解釈しわれわれの時代という特定の光の中で見るようにしか、出来事を理解させ得ないからである。この観点からは、歴史著述は小説、つまり、各時代が自らを反映している長い小説にすぎない。実際、解釈を超えたところ、ないし、背後には、歴史的真理は存在しないし、まして、解釈なしには存在しない。永久な真理もまた存在しない。たとえば『事柄が本当はどのようであったか』を示すような真理（ランケ）は存在しない。存在するのは、かえって、その形成を、つねに変化するがいつも新たに正当化されている先験的原理の寄与に負うている種類の、真理と歴史的経験とである。各時代は自らの過去と自らの現在を、自分自身の仕方で理解しなくてはならない。前者は後者なしにはなされえないのである故に、各世代にとって、歴史を書き、それを再三再四、新たに書い

て行くことが不可避的に必然なのである。私の論文の意図はしかしながら、これらが正当なる仕方で成就されること、すなわち、決して絶対的真理に到達し得ないであろうところのものである人間にとって可能な仕方で成就されること、を示すことであった。

(20) 私はここで強調したい。私は解釈の哲学を奉ずる人々と多くの点で意見を同じうする。思うに、しかしながら、彼らの表明せんと欲する多くの事は、彼らの曖昧なる文体を斥け、歴史知識にも分析的方法を移入するならば、ずっと明晰になり改訂すらしうるのである。(これまでのところ、知識を論じた哲学者達 (philosophers of science) は、この分析的方法を主として自然科学に用いて来たのである)。本論文において私の望むところは、このことが可能であることをはっきり示すことである。それは、知識の両分野が同一の論理的形式をもつが故に殊にそうなのである。解釈学の批判については G. Patzig, 'Erklären und Verstehen', in *Neue Rundschau*, Nr. **3—73**. 参照。

(21) たとえば 'Philosophische Fragen der Zukunftsforschung' (註(10)参照)。'Zur Frage des Relativismus und des Fortschritts in den Wissenschaften', (註(10)参照)。

(22) cf. K. Hübner, 'Zur Frage des Relativismus und des Fortschritts in den Wissenschaften' (註(10)参照)。

(23) ゲッチンゲン学派については H. Butterfield, *Man on his Past*, Cambridge 1969. 参照。

(24) E. Cassirer, *Die Philosophie der Aufklärung*, Tübingen 1932, pp. 269—279. 参照。

(25) V. P. Webb, 'The Historical Seminar, Its Outer Shell on Its Inner Spirit', in *Mississippi Valey Historical Review*, **42**, 1955/56.

(26) Voltaire, 'Essai sur les moeurs et l'esprit des nations', *Oeuvr*. **XVIII**,—'Le Pyrhonisme de l'Histoire', *Oeuvr*. **XXVI**.

(27) Montesquieu 'De l'esprit des lois', *Oeuvres Complètes*, vol. **II**. Paris 1951.

(28) 次の書のアクトン卿についての章参照。H. Butterfield, *Man on his Past* (註(23)参照)。

(29) この循環の構造については、cf. 'Zur Frage des Relativismus und des Fortschritts in den Wissenschaften', (註(10)参照)。

(30) Danto, *op. cit.*, Chapter Ⅷ. 参照。

(31) Schadewaldt, *Die Geschichtsschreibung des Thukydides*, Berlin 1929, p. 7.
(32) *op. cit.*, p. 27.
(33) *op. cit.*, p. 24.
(34) この過程は体系の明確化の一例である。
(35) cf. 'Philosophische Fragen der Zukunftsforschung', (註(10)参照)。更に、K. Hübner, 'Was sind und was bedeuten Theorien in Natur- und Geschichtswissenschaften?' ed. Greek Humanistic Society, Athens 1973, and in *Natur und Geschichte*, 10. *Deutscher Kongreß für Philosophie*, Kiel, 1972, ed. Hübner and Menne, Hamburg 1974.
(36) 就中、W. Rohm, *Der Untergang Roms im abendländischen Denken*, Leibzig 1930. 参照。
(37) ポパーが犯した誤ちの一つは、この選択が斥けられねばならぬと信じたことにある。たとえば私の論文 "Was zeigt Keplers 'Astronomia Nova' der modernen Wissenschaftstheorie?', in *Philosophia Naturalis* **XI**, 1969 において、私は、ケプラーが経験に対して、ある公理的諸原理を基礎にして如何に道理を通してよく抗弁しているかを、示そうと試みた。それらの原理はケプラーにとって犯すべからざるものであった理由はわれわれがルネッサンスと呼ぶ彼の生きた時代の包括的文脈にある。基本的にはこれはすでにある体系集合 (a system-set) すなわち彼自身の理論に矛盾する経験を生み出した体系集合を拒否することと、一つの新しい理論の樹立とを意味した。われわれは本質に関するケプラーの諸観念と確認 (confirmation) ないし観察 (observation) の役割とに関するケプラーの諸観念とを、彼の天文学の基礎をなす諸観念とに結びつけねばならぬ。彼の新しい理論の創出は同時に科学の新しい理論の創出であった。かくて彼は新たな先験的な道具立てを樹立し、かくて古き道具立てに代えてそれをルネッサンス時代の体系集合の中で正当化されていると考えた。ポパーは反証というものが錯綜した理論上の前提をもつことを見落としている。彼は反証を支持する議論は、原理による正当化の助けをかりて経験を反駁することによって阻止ないし疑問に付することが常に可能であろう、ということに気づいていない。

(筆者　キール大学哲学主任教授)
(訳者　大阪市立大学文学部助教授)